2009年度授業改善研修参加レポート　　所属（経済学部）　氏名　栗原　裕

「研修会等名称」
私立大学フォーラム
「学士課程教育を構築するー質的保証システムのためにー」

場所：同志社大学
期間：2009 年 7 月 18 日

１．研修の内容

　このフォーラムは実ははじめての参加でした。

　「基調講演」と「シンポジウム」の２部構成でした。前者は金子元久東京大学教育学部・大学院教育学研究科教授（日本高等教育学会元会長)、後者は飯野正子津田塾大学学長、義本博司文部科学省高等教育局企画課長、横山晋一郎日本経済新聞社東京社会編集委員が登壇しました。

　参加者は 159 名ということでした。

　金子先生は、なぜ今、学士教育が問題になっているのか、高等教育の環境変化、OECDーAHELO プロジェクト、質の「保証」とは何かなどについてご説明をされました。また、2006 年、2007 年に実施した調査結果の紹介をされました。

　そして、大学の現在の課題として、１）学士教育のガバナンス、２）恒常的な自己調査・改善のメカニズム、３）カリキュラム・授業プラクティスの改善、の 3 点をあげました。

　飯野先生は、学士課程教育に求められるもの、大学が取り組むべきことについてお話しをされ、津田塾大学の例をご紹介されました。

　建学の理念の現代性、社会に貢献できる力を育む「自立した学び」の例、重点配分予算の活用などの例をご説明されました。

　義本氏は、大学を取り巻く状況、大学改革における課題、質保証システムの強化、大学の機能分化と大学間ネットワークの促進、高等教育財政の現状と課題、そして留学生 30 万人計画と大学の国際化について、種々のデータや資料をもとにご説明をされました。

　途中、中教審諮問「中長期的な大学教育の在り方について」の背景、審議事項などについても説明がありました。

　横山氏は、中教審の学士課程教育答申のキーワードをまずあげ、それぞれについて簡単なコメントをされました。そして学部教育の充実、立て直しが急務であること、教育軽視を続けることには限界があることなどについて持論を展開されました。

　入ってよかったと思える大学、社会に認められる大学、競争力のある元気な学部をつくること、教職員がやりがいや充実感を感じる大学にすべきであると、お話しされました。論は、「学士力」の例示の妥当性、「多様性」と「標準性」の相克、高大接続テストなどにも及びました。

２．研修の成果

金子先生は所属学会で何度かお話を伺っていますが、今回ははじめてのテーマでもあり新鮮で刺激を受けました。飯野先生、横山さんのお話は今回はじめて伺いました。

OECD の「AHELO プロジェクト」については、学部長就任以来、気になっていました。経済学部が当初ターゲットとなった印象がありましたが、喫緊の問題とはならないようです。今回、もっとも大きな成果はこの確認ができたことかもしれません。

あえてもう一つ申し上げれば、「高大接続テスト」について、否定的な考え方が出されたことも成果なのかもしれません。ただ、中教審の考え方と一致しているとは言えず、引き続き注視が必要なのかもしれません。

質保証システムの強化については、各主体、学部に委ねられた形になっています。目的、目標の明確化、ターゲットを鮮明にすることが求められているように感じます。ただ、解答は一つではなく、またあるべきでもなく、大変悩ましい問題かと思いました。経済学部として独自のスタンダードを持つべき時期に来ているのかもしれません。

大学間の連携については、経済学部（経済学研究科）として課題の一つと考えています。学部長任期内に何らかの提案ができればと考えています。それは、FD コンソーシアムのようなもの、あるいは高等教育分野に限ることでは必ずしもないのですが。

経済学部はメンバーの協力により、先進的、先端的に種々の取り組みを実行してきたと思います。一方、「競争力のある元気な学部をつくること、教職員がやりがいや充実感を感じる大学にすべきである」、といったお話は、私が先日の後援会支部総会で申し上げたことで、あらためて感銘を受けました。

こうした学部づくりに微力をささげたいと思っております。

３．授業への研修成果の反映状況

授業に直接反映することは困難かと思いますが、7 月 23 日の教授会にて、先日のベネッセ主催のフォーラムと同時に報告を予定しています。

学 部 長	ＦＤ委員長	ＦＤ委員会	企画・広報課長	係